会　議　議　事　録

会　議　名	第二回　教育課程編成委員会		専門学校 東京工科自動車大学校 専門学校 東京工科自動車大学校世田谷校 東京工科専門学校品川校
開催日時	平成　　２６年　２月　７日（金）　　１５時　～　１７時		
会　　場	東京テクニカルカレッジ１１０４教室		
参　加　者	委員	14 人	（参加者） 佐藤　康夫、小林　完、竹尾　和也 佐々木　洋文、大石　安孝、谷川　潮、田村　智 甲斐　俊和、成田　仁、山口　泰之、太田　亨、澁谷　健 （欠席者） 齋藤　昭男、沼田　勇
	事務局	１人	金澤　晃男
会　議　碌	●開会挨拶(佐藤) ●委員紹介(小林) ●前回議事録の確認(小林) 前回の議事で、「カリキュラム改訂に関して、どこまで変更可能部分なのかを示して欲しい」との質問があり回答を行ったが、下記を補足する。 ・国土交通省の指定時間　1800 時間(50 分単位時間) ・科目カリキュラムとして約 8%増しの時間数設定。 ・その他、一般教養、研修、就職プログラム等は指定時間外で実施 ・科目名の変更や新規科目の設置は学則変更を伴う（役所への申請が必要）ため単年度では不可能) ・ただしコマシラバスを含む科目の内容、試験内容等は変更可能である。 **●審議１** 第一回教育課程編成委員会における委員からの要望は主に今後の自動車において環境・エネルギーに対応した電気自動車等・ハイブリッド等の新機種の割合が高まりつつあり、その取扱いに対する教育内容の充実を期待するとの意見があった。 すでに 2 級課程では 1 年 5 期に実習科目を設けているが、その中で実習車を使用し、実践的な経験を積ませる時間を増すように検討を開始している。 また、カリキュラムの改善に伴い必要となる教員の専門性、教材、設備等については校長が次年度事業計画に反映するよう組織的に取り組むようになっている。 その他、「現在のメカニックは、接客要素が非常に増えサービス全体の仕事を担っている。先生が現場のニーズを理解」する必要がある。「専門的スキルだけではなく、それ		

	らに必要な職業人としての能力育成も検討してゆくべき」との重要な意見もあり、今回の委員会で、学校側の考えを示す事となっていた。 平成 26 年度カリキュラムに関して､委員及び企業関係者からの意見を反映した下記の改善案を提示し審議を行った。 **①ハイブリッド車への対応** 市場に出ている自動車が環境・エネルギーに対応したハイブリッド・電気自動車等の新機種の割合が高まりつつあり､その取扱いに対する教育内容の充実を期待するとの意見があった。 ・2 級課程では「ハイブリッド車の整備」の科目を設けて対応しているが、その中で実習車を使用し、実践的な経験を積ませる時間配分の調整に関して検討を開始している。具体的には次年度より新たに発行される全国自動車大学校・整備専門学校協会(ＪＡＭＣＡ)編の教科書を使用し、低圧電気取扱講習の内容を確保したまま、よりＨＶ・ＥＶの整備に即した整備作業を盛り込む改善を図る。 ・1 級課程においては、かねてより企業ニーズのある「ハイブリッド・バッテリの脱着」に関わる実習を追加する。 **②実習評価の精度を高め実践的スキルを修得** 平成 18 年度より実習科目に実技試験を取り入れてスキルアップを図ってきている。また H22 年度には企業ヒアリングにより「必修スキル項目」を挙げて実技試験のレベルアップを図っている。しかし、まだ必修スキルの底上げが不充分であると感じている。 ・そのため H26 年度に「実践力評価方法委員会」を校に設置し、新評価方法の導入により東京工科グループとしてスキルを保証できるものとして行く。 **③職業意識の醸成を図る実習授業の展開** 社会人の基礎力となる部分が、企業の要求レベルに届いていない。 学内では各科目担当者から「４S」「報連相」「PDCA」など実習科目、就職プログラム、プロジェクトセミナーを通じて指導しているが、校全体での足並み（基準）が明確になっていない。 このような社会人基礎力を養うプログラムを②で示した「実践力評価方法委員会」において計画・立案する。 **審議内容** ①ハイブリッド車への対応 田村）教材・教科書はトヨタか？ 山口）日整連教科書にはトヨタと思われる内容が多く記載されており、準じてトヨタの物を使用している。

	佐々木）現在ＨＶ、ＰＨＶのシェアはすでに７０％となっており、一級に限らず二級(2 年次までの)カリキュラムにおいても相応の知識と技術の付与が必要と考える。 また、運転支援システムの発達もめざましく、これらの分野においても関心を持ち、対応できるスキルを身に着けておいて欲しい。 山口・佐藤）日整連教科書も年々新技術を盛り込んだ内容となって来てはいるが、まだ国家試験レベル(特に二級)と実務レベルとに乖離がある事は学校としても感じており、施策を検討しているところである。 佐々木）技術進歩のスピードについて行くには、メーカーからどれだけ情報が得られるかが重要なカギとなる。 ②実習評価の精度を高め実践的スキルを修得 ③職業意識の醸成を図る実習授業の展開 成田）「実践力評価方法委員会」の構成メンバーは？ 山口）教員・主任・教務で構成をイメージしている。 成田）何を以て「実践力」のものさしとするかは、企業の声も必要ではないか？ 山口・佐藤）もっともであり、是非協力願いたい。 佐々木）現在はメカニック整備技術のみならず、一人で接客もこなせるスタッフが必要となっているが、その意識がなくアンマッチを感じ辞めてゆく新人が多い。職業意識の醸成も勘案して欲しい。 佐藤）単一科目でなされるものではなく、普段の授業の中にコスト意識を盛り込んで行くのが最も現実的であると考えている。 佐々木）オプションでも良いので企業研修を組み込んだらどうか？ 谷川）コンプライアンス＝企業モラルの大切さを授業に盛り込んでほしい。 以上、審議１(3 点)について審議がなされ、全委員の承認を得た。 **●審議 2** H26 年度の取り組みとして要望する内容に関して、教育課程編成委員会の各委員からの意見を抽出した。 佐々木）　直接のお客様に加えて地域との関わりも企業としての生き残りを考えると大切。清掃活動、自治会活動等、社交性を持った人材の育成を期待する。 成田）　技術の習得、資格取得が専門学校の本分である事は理解はしているが、それだけでは社会では通用しない。営業、数字、企画、リーダーシップ等、何か武器になる何かを見つけて伸ばす教育を期待する。 谷川）　企業活動は多くの課題とその解決が主な仕事、業務に必要な基本修得は当たり前のことで、問題解決能力、情報収集・処理能力。物事に関心を持つ、観察力などが学校時代に醸成されていることが必要である。 竹尾・佐藤）当校では問題解決力をつけるためにＰＤＣＡを軸とした実践型の授業で

	ある「プロジェクトセミナー」を実施しているが、まだ同好会の域を脱していない反省がある。今後、よりブラッシュアップしてゆきたい。 佐々木）「人に聞ける」ことも人間力であると考える。 大石）　言われたことだけしかできない者がいる。創意工夫する力が足りない。 田村）　やっていない事をやったと言う正直さに欠ける者がいる。 それに対し、先輩上司も叱らない、叱れないことも問題。 出来そうなことはやるが、出来そうにないと思うと投げ出す傾向がある。 甲斐）　第一に基礎技術、基礎さえあればどんどん伸びる。 ノギス、マイクロは頻度はないが、いざと言う時に使える事が大事である。 「クルマ好き」を高めて欲しい。 ＨＶカリキュラムもちろん有り難いが、それより電気の基礎が肝要である。 以上、審議２について審議がなされ、「社会人基礎力向上」を教育課程編成委員会の今後の議題として進めてゆくことを全員一致で決定した。 **今後の予定** 平成 26 年度教育課程編成委員会 ● 委員会　年 2 回開催予定(年度初め、終わり) ● 内容：カリキュラム改善に対する意見集約 以上

会議風景